

## 〈研究余滴〉撥音・促音・長音のモーラ化の時期について

坂口, 至  
宮崎大学教育学部講師

<https://doi.org/10.15017/10419>

---

出版情報：文献探究. 21, pp.78-81, 1988-03-25. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



〔研究余瀆〕

撥音・促音・長音のモーラ化の時期について

坂口至

撥音・促音・長音が、モーラ音素として国語の音韻組織の中に独自の位置を占めるようになった時期については、今日二通りの考えがあるようである。一つは、それらの音が中古末期から中世初期にかけて一応の表記法を確立した後、促音や撥音を中心に無表記や相互の混用表記が中世末期頃まで見られる事実から、それらのモーラ化の時期を近世初期以降とする説である(①)。そしてもう一つは、それらの音を等し並みに扱わず、撥音・長音は中世の比較的早い時期にシラビーム性を脱したのに対し、促音のみ近世初期頃までモーラ化が遅れたのではないかとする説である(②)。

小稿ではこの問題につき、これまでと違った観点から若干の考えを述べてみたいと思うが、取り扱う時期も根拠とする資料も狭く限定されたものに過ぎず、今後によくを待たなければならぬ。小報告たる所以である。

撥音・促音・長音のモーラ化をめぐって、これまでの論でも直接、間接に様々な資料が用いられてきたが、不思議なことにモーラ(拍)そのものに対する我々の先人の意識が顕在化した資料については触れられることがなかったようである。

中世・近世の我が国の人々の拍意識が文献に現れる様式としては、次の二つがあるように思う。

- I 拍(モーラ)を直接に利用した言語作品
- II 拍(モーラ)を符号等で明示した言語作品

Iには、それらの音が現われやすいもので言えば、例えば連歌・俳諧・歌謡などがあり、IIでは、謡曲・狂言・幸若舞・浄瑠璃などの詞章に付された胡麻譜の類が挙げられる。Iでは、撥音・促音・長音が音数律としてどのような扱いを受けているかを調べる必要がある。例えば、それらの音を含む句がそれらの音を含まない句に比して、字余りになる率が際立って高いとか、規則的に字余りになっている場合があれば、それは撥音・促音・長音の非モーラ性を示す根拠となる。またIIでは、基本的に一拍を表す胡麻譜の付され方を調べてみ

ることである。

これらのうち、ここではIIの中の狂言資料に付された胡麻譜についてだけ検討してみようと思う。それ以外のものはすべて今後に譲らなければならないが、Iに関しては、『ロドリゲス日本大文典』に、

韻文では、よ、お、う、An、en、in、un、At、et、it、o  
t、ut、Ai、ei、oi、uiの音節が二音節の価値を持つてゐる。

(土井氏訳本、651頁)

という興味ある記述があるほか、文字の影響・拘束などの要素も考える必要があるかも知れない。

池田廣司氏『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』(風間書房、昭四二)の中に、付録として和泉流狂言古写本のうち一七世紀後期書写の通称『和泉家古本』の狂言歌謡等を集めた「抜書」の影印が収められている。著者は、和泉流宗家九世山脇和泉元信(？元禄六一693)で、最近の研究では天和頃の書写とされている(③)。

この「抜書」の狂言歌謡には、他の例に漏れず、謡曲譜本からの流用と思われる様々の胡麻譜の類が付されている。それらの中で、平胡麻・下胡麻と呼ばれるものが付された部分は、基本的に一拍に唱えるものと考えられている。ところが、この平胡麻、下胡麻の付けられ方を仔細に見ていくと、今日当然一拍と見なして疑われない部分に胡麻譜の打たれていない場合がまま見られる。その部分は全体で54箇所ほどであるが、そのうちの48箇所はかな書きの促音相当部分もしくは促音を含む漢字表記の部分で、残りが長音相当部分となっている。いま、長音は後回しにして、促音の該当部分を促音の内容によって幾つかに分類して出すと、次のようである。(数字は底本のページ数)

1 動詞の音便形

- とつたり(取、546・657)ふつた(降、555)そつたり(刺、584)とつて(取、589・733)きつて(切、591)たつたり(立、640・640)つくつて(作、640)とまつた(止、642・696・696)よつて(寄、653)もつて(持、688)

2 擬態語など

- そつと(505)くわつと(550)すつはと(すっぱと、554・555)
- くつすと(554)くつと(592)とつと(どつと、593)つつ

しと(ず)しと、6553(て)ちて(ち)と(684(ま)じと(699)

3 接頭語

おっとり(押取、671)おつ取(押、688(ま)つくろ(真黒、691)まじしろ(真白、692)

4 名詞などの一部

おとと(夫、534)まじさき(切先、593)たつとかり(尊、602)とじさか(鶏冠、640)尤(も)つとも、489・489(9)

5 字音語中の促音

しじちん(七珍、486・493 Kicchin(④)かじこ(羯鼓、515 Cacao)ほじすじ(法水、599 Fotsui(⑤)あじこう(悪口、677 Acc)めつほう(滅法、733)八丁(515・515)五十石(554)法華(572 Foege)十はじ(一杯、587)別当(593 Bettō)仏果(681 Bucqua)⑥

ところが一方では、促音に対して他の音同様きちんと胡麻譜が打たれている箇所も、次のように多い。

1 動詞の音便形

ほこつて(誇、503)思ひまじつて(切、541)おつとつて(押取、541)とつたらば(取、546)とつて(取、654)おつた(織、579)まじつて(去、584)あまじつて(余、593)とまじつた(止、642)642(かうけは)つたる(豪家張、654)よじつて(寄、655)うけたまわじつて(承、658)たじつて(立、658)ふじつ(降、661)なじつて(成、663)683(も)あかじつて(燃上、663)よじつて(因、671)つまじつて(詰、681)かいとつて(買取、733)

2 擬態語など

まじつと(547・550)くわじつと(549)そじつと(550)しじくしくと(590)はじつと(は)じつと、591・592(や)じつと(648)てつちと(685)つじつと(733)ちよじつと(737)

3 接頭語

おっとり(押取、486)おつとつて(押取、541)うつせらにく(打空槽、668)

4 名詞などの一部

もつとも(尤、487)まじつたう(全、595)まじさき(切先、591)

あつたら(借、616)尤(487)

5 字音語中の促音

けじこう(結構、490 Geccō)こつかん(酷寒、587)八徳(49 Faltou)十徳(546 Ittō)一尺(549 Ixacu)百貫(54)説法(565・576 Keppo)一切(597 Issai)一体(57 Ittai)法華(572)八百(661)一銭(667 Ixen)仏果(679)添皆(687 Kiccai)富貴(700 Fucqi)一足(733 Issou)

なお、口頭語では近世初期頃に開音節化したと考えられているいわゆる語末の促音(入声韻尾)が、この当時の狂言でどう発音されていたかは明らかでないが、あれこれ間接的な徴証⑦から閉音節のまま伝承されていた可能性が強いようである。ここでは一応促音の一種と認めることにし、胡麻譜との関係を見ると、次のような語に例外なく胡麻譜が打たれている。

6 語末の促音

さんみつ(三密)⑧、599)まじちうじ(輕忽ヤ、648 Qeoot, ioot)ひじゆじ(秘術)⑨、609 Fijut)てじちやう(鉄杖、60 Tetsiō)せじしじ(青漆、669 cf. 黒漆 Cocuxit)ひんはじ(鬘髮、699 Bimpat)せうめじ(生滅、733 Xōmel)じやへめじ(寂滅、733 Iacumet)美物(500 Bihut)珍物(500 Chin but)成仏(687)道(597・576 Iōbut)仏前(589 Butj en)念仏(608・602 Nembut)しゃく物(借、600 Xacumot)二六仏(684)

以上を、見やすいように数表にまとめてみよう。(数字は延べ語数)

促音の内容	胡麻譜ナシ	胡麻譜アリ	胡麻譜ナシの比率
1 動詞の促音便	15	21	41.7%
2 擬態語など	10	11	47.6%
3 接頭語	4	3	57.1%
4 名詞などの一部	6	5	54.5%
5 字音語中の促音	13	17	43.3%
6 語末の促音	0	18	0%

右に見るように、語末の促音を除けば、促音相当部分に対して胡麻譜が付かされている割合とそうでない割合は、かなり拮抗していると言えようである。

れは何を意味しているのだろうか。

まず、考える必要があるのは、促音の実際の発音とは無関係のもので、表記上のある種の要請から単に胡麻譜が省略されたに過ぎない可能性である。謡曲の譜本ではそういう場合のあることが添田建治郎氏によって報告されている(⑨)。しかし、謡曲譜本においては、物理的に胡麻譜を打つ余白が狭い箇所あるいは心理的にそう感じられる箇所で胡麻譜が省略されているようで、その対象も漢字表記部分に限られている。「抜書」では、右に見るように十分なスペースがあるかな書きの場合でもままた胡麻譜が打たれていないのである。また、謡曲の場合、「抜書」のように促音のような特定の音に集中して省略されているということもない。添田氏が扱われた資料の場合、板本であることもあるいは関係しているかと思うが、いずれにしても「抜書」の場合、単純な胡麻譜の省略とは考えられないようである。

次に考えられるのは、促音が実際の発音において、撥音や長音と違い、ほとんど響きを持たない性質のものであるために一拍として認識されなかった可能性である。この可能性はゼロとは言えないが、そうであるならば促音相当部分が一律に胡麻譜ナシになっていてもよさそうである。挙出例でもわかるように、同一の語においてさえもしばしば胡麻譜が打たれたり打たれなかったりしているのである。

これはやはり、著者の意識の中では、促音がいまだ拍として十分独立した地位を占めるに至っておらず、中途半端な長さと感じられたために、ある時は胡麻譜が打たれ、ある時は打たれないという状況が現われたと考えるのがいいのではないかと思う。

なお、促音の自身に関しては、語末のもの以外は、和語、漢字音等の区別は無関係らしいことが注意される。語末の促音の場合は、そういう発音だったと仮定しての話であるが、謡曲等で「ノム」「フクム」などと呼ばれているように普通の促音とは性格の異なった発音法であったようである。この資料ですべてに胡麻譜が打たれているのは、あるいはその「ノム」「フクム」という発音の仕方そのものが他の促音より時間的な長さが必要であったためかも知れない。さて、後回しにしていた長音と胡麻譜の関係であるが、胡麻譜が打たれていない可能性のあるのは、次の6箇所である。

かうぶく(降伏、483) 女らう(一)郎、533・549(とうと)とうと(とうど、550) 山椒(596) 太郎冠者(722)

これらのうち、「山椒」は古くから短呼形があり、除外したほうがよいかも知れない。また「女郎」もその可能性があり、同時にこの語は「よその女らうみてわか妻みれは」という韻律があった部分に出たもので、故意に短呼形で発音させようとしたものかも知れない。この韻律の制約は、あるいは促音の場合にも当て嵌まるどころが若干あるかも知れないが、多くはない筈である。いずれにせよ、長音においてはこれら以外の多数の用例に対して胡麻譜がきちんと打たれており、促音との違いは歴然としている。

なお、撥音については、胡麻譜は予想される箇所総てに打ってあることを付け加えておく。

以上、十七世紀後期の狂言台本『和泉家古本』の「抜書」における胡麻譜と促音・撥音・長音の関係を見ることによって、促音の特異性を浮かび上がらせることができたと思うが、他の狂言資料ではどうであろうか。

複製本で筆者が見ることの出来たものの中では、用例の数という点では『和泉家古本』と比較にならないが、大蔵流のいわゆる『虎清本』(正保三1646)も促音に対する意識は同様であったようである。これには、延べ7箇所促音相当部分があるが、その6箇所までは胡麻譜が打たれていない。『近代語研究第三集』(武蔵野書院)の影印の丁数で言うと、二十六オの「くだつて(下)」「一例と五十オに6例集中している」「一はい(一)杯」がそれで、胡麻譜が打たれているのは、四十オの「たつとかり(尊)」「一例のみである。この例も前後が「行者ぞたつとかりける」となっており、「行者」に胡麻譜が四つ打たれているところから、五七の韻律に合わせたものと思われ、本来他の6例と同じ扱いを受ける筈のものであったのかも知れない。

その他では、いわゆる『虎明本』(寛永二十1642)にも延べ4例ほど促音の胡麻譜無表記部分がある(大蔵弥太郎氏編『古本能狂言一』の20・28ページの「尤(もつとも)」「25ページの「結構」、28ページの「七珍」)が、全体から見ると僅少でしかない。

また、板本の『狂言記』(万治三1660初板、ここでは勉誠社版影印本による)にも「たばつた(一)賜、巻二・三オ」「たつて(一)発、巻二・三一オ」「きつと(一)巻二・三二ウ」「おかつさま(一)御方様、巻四・一六オ」など胡麻譜の無い促音部分が散見する。もっともこの資料の胡麻譜は板本であることも手伝ってか若干杜撰なところもあるようである。

このように、一七世紀の狂言資料では、大体において何らかの形で促音が他の撥音・長音とは違った扱いになっているようであるが、中には例外もある。たとえば和泉流の最古本である、いわゆる『天理本』（寛永正保頃書写）は、『和泉家古本』の親本的位置にあるものようであるが、その「抜書」では促音・撥音・長音の区別なく総てに胡麻譜が打たれている。また、促音の胡麻譜無表記の例がある『虎明本』も、時期的には『和泉家古本』より四十年ほど早い資料であるにもかかわらず、促音に対して胡麻譜の打たれている数の方が圧倒的に多いという点も気になる。

それはおそらく、著者それぞれの、促音を含めた発音一般に対する注意深さの差が現われたものであろうと思う。特に『和泉家古本』の「抜書」の場合は平胡麻、下胡麻が当時のアクセントをかなり良く反映しているようである（それでも7/8割というところだが）。当時の促音の微妙な発音に敏感だったのもうなづけるのではないかと思う。一方『天理本』の「抜書」では、拗音音節に胡麻譜を二つ打つような杜撰さが目につくが、同時にアクセント資料としても役立たない（最末尾のそれまでと別筆の部分のみ若干アクセントを反映しているようである）。『虎明本』では、初冊の「脇狂言之類」の冒頭部分だけに促音の胡麻譜無表記が集中しているが、これにはかつて考察したように⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、の虎明の表記態度が関係しているのではないかと思う。

○ 撥音・促音・長音のモーラ音素化をめぐって、一七世紀の狂言資料という限られた範囲で検討してみた。要は、この時期、促音と他の撥音・長音との間に音量の差があり、撥音・長音は既にモーラ化していたのに対し、促音のみはまだ十分シラビーム性を脱け切っていなかったのではないかとすることである。これは、最初に紹介した二つの説のうちの後者にちかいかということになる。ただ、ここで資料としたのは、いずれも狂言の詞章の中でも伝承性・固定性の比較的強いと考えられている歌謡の部分であるので、著者それぞれの日常的な発音からいくらかずれている可能性も否定はできないが、時代的に若干引き上げる必要が生じたとしても、促音と他の二音との違いは不変である。

なお、一八世紀以降の資料については調査を十分進めていないが、瞥見した感じでは促音も他の撥音・長音と足並みをそろえてモーラ化を完了しているようである⑳。

## 注

- ① これらの問題に早くから取り組んでこられた浜田敦氏のお考えはこれに近いようである。（多くの論文があるが『音韻史（国語と国文学三七）一〇、昭三五』『日本語の史的研究』収など。最近では、柳田征司氏『室町時代の国語（東京堂出版、昭六〇）』がこれに近い。
- ② 早く桜井茂信氏がアクセントの面から（中世京都方言の音節構造）『国語学』四六、昭四二、「中世日本語の音節構造の諸問題（国語国文学四二—三、昭四八）」また最近では、迫野康徳氏が『東国方言などの関係から（促音・撥音の表記の動揺）』『天正狂言本の場合—文字研究八四、昭六二』、『中世の撥音（国語国文学五六一—七、昭六二）』これに近い考えを発表されている。
- ③ 天理善本兼書『寛流狂言傳書保教本四』（八木書店、昭五九）の田口和夫氏の解説参照。
- ④ 参考までに『日葡辞書』のローマ字表記を掲げる。以下同じ。
- ⑤ この『日葡辞書』の表記は「ressin」の誤りだろう。
- ⑥ このほかに『日本』647・647・676、胡麻譜が三つなど保留すべき語がいくつかある。
- ⑦ 謡曲においてこの発音が遵守されていること、狂言においても聞かれること（筆者は、大蔵流山本東次郎家の因幡室という狂言で「大仏」の発音を聞いたことがある）狂言において夕行連声が規則的に残っていること、など。
- ⑧ 語末の促音は後に続く語によって「ノム」「フクム」発音と「ツメル」発音に分かれるようであり、後者は普通の促音と同じ発音になるらしいが、ここではとりあえず一括して出した。これらの中では連声している「ひじゆつ」がその例である。
- ⑨ 謡曲譜本のある種の施譜法（一）（山口国文1、昭五三）参照。
- ⑩ 拙文『虎明の表記意識』（本誌十一号、昭五八）参照。
- ⑪ 『続狂言記』（元禄十三—一七〇〇）『寛流』『寛傳右衛門保教本』（享保前期1720前後）、和泉流『古典文庫本』（天保十四—一八四三）などを見た。